昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十九年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第三〇四号）

慈光

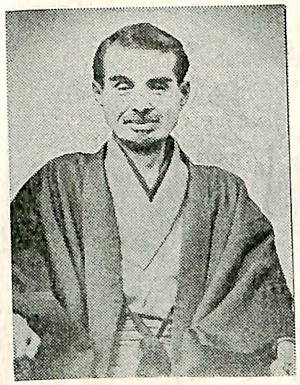
第二十六巻　第九号

池山先生特集号

目次

池山栄吉先生略歴……(1)
棺の中の父……池山敏朗……(2)
出会い……信国淳……(4)
燃える静けさ……川畑愛義……(7)
池山先生を憶う……長谷顕性……(11)
私のノート……福本慶子……(13)
池山先生の追憶を感謝……北岡行男……(16)
池山先生小伝……花田正夫……(18)

池山栄吉先生略歴



明治六年　東京市誕生。ドイツ語協会学校卒業。学習院に奉職。

明治三十一年　宗教法案反対運動に大谷光演法主を中心として近角常観師と協力して遂に成功。

明治三十三年　近角師と共に東本願寺から欧洲留学生として派遣され、近角師は世界の宗教事情、池山先生は社会問題、労動問題の研究。

明治三十五年　帰国後、東京の真宗大学（大谷大学前身）の教授。

明治三十六年　ドイツ留学中学習された労仂福祉、社会事業のため、時の桂首相、台湾民政長官児玉源太郎氏、後藤新平氏、其他官民有志の後援を得て発足。先ず東京神田町に徳香社を設立、自活自営のため煙草店を開業。

明治三十七年　日露開戦により煙草は政府の専売となり、営業不振におちる。

明治三十八年　徳香社解散。手足の皮膚病劇し、真宗大学も退職。府下の荏原の地に浪々の生活。この頃より求道学舎に近角師をたずね、歎異抄を読みはじめらる。

明治三十九年　大阪桜宮に移住、痼疾の療養中、近角師と沢柳政太郎博士の斡旋により、岡山第六高等学校教授。

大正二年　四十二歳（数え年）の時、大疑団に遭遇、歎異抄により信心開発、新生活に入らる。

大正六年　清子夫人、突然胃ガン、手術不能の宣告を受けそのきざみに忽ち念仏者とならる。

大正七年　五月に清子夫人往生。その記念に『ドイツ語歎異抄』の出版。

大正九年　篤信の母堂逝去。その記念に『意訳歎異抄』の出版。

大正十一年　『絶対他力と体験』の出版。

大正十三年　甲南高等学校の丸山環校長の懇請により、夏転任。住吉に居住。

昭和二年　『信を行く旅人』の出版。

昭和三年　友子夫人と再婚。

昭和四年　大谷大学教授となり、京都紫野に仮寓。三男の甲南高校生の幸吉様急性腎臓炎で重態におちいり、念仏の人となり、安らかに往生。秋に洛西蓮華谷の新居に移らる。

昭和十二年　病気のため谷大辞任。『仏と人』を出版。

昭和十三年　十一月八日。行年六十七歳往生さる。近角師の撰により「無碍院一道栄信士」の法名贈らる。

昭和十四年　一週忌記念に、追慕録『呼子鳥』出版。

昭和三十九年　西山の浄住寺境内に名碑建立。

棺の中の父

池山敏郎

長い叛逆の旅を終えて
私が家に帰った時
父は棺の中に居た。

静かに閉じられた瞼の上に
私は父の心を見た。
『よく帰って来てくれたな、
私はうれしいよ、
私の歩いて来た道を
お前も亦歩いている、
私は安心だよ……』
すべてを赦（ゆる）すやさしい父の
声無き声を　私は聞いた。

年経た松梢の様な
太くたくましい父の眉は
金剛の信を語っていた。
秀でた額（かん）骨と高い鼻は

世の俗評に笑って堪えた
父の気骨を示していた。
長い豊かな半白のひげは
七十年の味な辛酸を
たっぷりと含んでいた。
痛ましく痩せた首のまわりを
私は秋の草花で埋めた。

ああ叛逆の旅を終えて
私が家に帰った時
父は棺の中に居た。

病み衰えて死んだ父は
神々しいまでに安らかに
ほほえんで私を待っていた。
『泣かなくてもいいよ、
私は死んではいないよ、
私のつかんだ永遠の命を
お前もやがてつかむだろう、
私は安心だよ……』
不滅の父の声無き声を
ひしひしと胸に私は聞いた。

昭和十三年十一月。

池山先生追慕

玉尾延忠

昭和十年十月二十七日洛北蓮華谷に訪いて
取次の行きたる方ゆ師の君の吾が名を言はす声ぞきこゆる
しはぶきの声ひとつしてドア開き師（きみ）出でましぬ笑
みのゆかしく
まみあへば念仏したまふ先生の清（すが）し御顔（みかほ）にわれは足らへり
生死（いきしに）のさかひにありてみみづから経（へ）にしおも
ひをねんごろに言はす
くすりしは命危みありけりとことなげにしもかへりみて言
はす
師に聞きてこころに仰ぐもののあり今日もまた聞くこの一
つこと

（呼子鳥より）

出会い

信国淳

故池山栄吉先生とこの私との出会いについて、何か書くようにとのことであるが、私にとつて先生との出会いといえば　このうつし世における「教令念仏（教えて、念仏せしめる）」の人との出会い、—つまり、「有縁の智識」との出会いだったということにつきる。

顧みてみると、先生という存在は、私には、よそ目ながら、そのお姿を拝したそもそもの初めから、寂かな光のなかに、安んじて念仏申していられる人として、深く印象づけられたもののようである。それはもう四十何年もの昔のこと、—だから私もまだほんの大学を卒えたばかりの若輩の頃だったのであるけれども、恰もその頃私は、自分という存在が、「根こそぎにされたもの」として云い当てられるほかないようなものにすぎぬのではないのかといった、何かそんな自己存在についての不安感からとりつかれていたということもあって、そうして寂かな光のなかに安んじて念仏申していられる先生のそのお姿からすつかり魅了されてしまい、そうした姿を現わされる先生に敬慕、渇仰の念を捧げて、その先生のお姿を新しく私自身のうちに念持することにさえもなったのである。それにその後久しからずして私が、生まれて初めて念仏というものを、とにもかくにも自分から、口にしてみよう、称えてみようと思いたつことになったのも、先生の示される範例に順って、自分もまた念仏申す者になりたいという、——念仏申す者になって少しでも先生に近づきたいという、何かそんな思いが、私のうちに動き始めるということがあったからのことでもあった。そしてそういうことは思ってみると、池山先生という方を私が最初から、私にとっての教令念仏の人として、—有縁の知識として、受け取っていたことを意味する以外のことではないのである。

しかし、そのことは今日また改めて思ってみると、池山先生という有縁の知識の形をとりながら、弥陀の無縁大悲の御催しとして、もはや有縁の知識ならぬ、——もはや

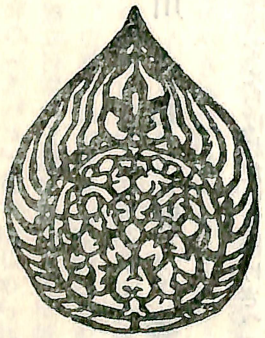
教令念仏の「人」ならぬ、教令念仏の「諸仏」なるものが、すでにして私に関わりをもとうとされていたことを、実は意味することであったのである。というのが、私どもにとっての有縁の知識を、―教令念仏の「人」を通しながら私どもに関わって、謂うところの教令念仏ということを、事実文字通り教令念仏として私どものために実現させることの出来るもの、―そしてまさにそのことによって、私どもの深くも囚われているこの現し世から、―この世界から私共を解放し、私どものために私共の世間を超え出る者として、よく無上涅槃への道を開くことのできるもの、―つまり私どものためによく念仏成仏の道を教えること、与えることの出来るもの、それが弥陀の無縁の大悲から立ち現われ、発遣の教命をもって私共に関わる諸仏というものにほかならぬからである。そういう諸仏というものだけが、実は有縁の知識、―教令念仏の「人」の言葉を通しながら、よくその教命をもって私どもに関わり、私どもをして念仏せしめることが出来るのである。

そういうことで私も、この世間においてたまたま「つくべき縁」のあった、池山先生という教令念仏の人との出会いを通しながら、その人の教えの言葉に導かれて、そういう諸仏なるものとの出会いを果たし遂げるという、そんな時を迎えることが出来たのであった。ではそれはどのような時だったのかといえば、それを『歎異抄』に依っていうなら、私どもの一生において「ただ一度あるべし」と、そこで言われている私どものその「廻心」の時だということになろう。私どものこの一生においてただ一度あるべきものとされるその廻心とは、「弥陀の智慧を賜る」ことをもって始まるとされているのであるが、そこにそうして弥陀の智慧を賜りて」といわれているそのことは、実は弥陀の智慧によるところの念仏三昧を賜わることを意味するのであり、そしてその念仏三昧というものが、清浄な、無碍な光の世界となって自らを示現する諸仏と、その光の諸仏に向って目を覚ます諸仏の御弟子としての私どもの我なるものと、そういう二者の相念による出会いをもって、実はその内容とするのである。つまり、こうして「弥陀の智慧を賜りて」といわれているところには、清浄な、無碍な光の世界でまします諸仏を憶念して、もはやそれから離れることなく、ただその諸仏の教命にそのまま順おうとするところの、諸仏の御弟子としての私どもの新しい我の誕生が、―そういう私どもの超越的な我の私どもにおける成立が含意されているのだということである。

『歎異抄』第十六章に出ている「弥陀の智慧を賜りて」ということばは、「日ごろの心にては往生かなうべからずと思ひて、本の心をひきかへて、本願をたのみまゐらする

をこそ廻心とは申し候へ」と続くのであるが、そうして続けられているその言葉こそ、初めの「弥陀の智慧を賜りて」とあるところで、いまいうような諸仏と、その諸仏の教命に信順する仏弟子としての私どもの我との出会いがすでにして実現されているということがあって、そこで初めて云うことの出来ることを言ったものなのである。すなわちそういう言葉のぜんたいが、罪と悩みなくしては生きられぬ私ども衆生の上にかけられた、その諸仏の憐念に応えながら、仏弟子としての私どものその我が、諸仏発遣の教命に順って、十方衆生の救いのために、諸仏の光の世界のそのなかから特に、阿弥陀仏の安楽世界を選びとり、その安楽世界への衆生往生の道の成就によってこそ、自らの、念仏成仏を全うしようとするという、―そしてそのためにこそ「本の心をひきかへて」弥陀の本願をたのむに到るという、そういう仏弟子の新しい自己決定というものを確かに表現しているのである。

私は、『歎異抄』のこの廻心の文というものこそ、「仰いで、釈迦発遣して、捐(おし)へて西方に向はしめたまへることを蒙る」と宗祖聖人の云っていられる、その釈迦諸仏の御弟子の私どもにおける成立をつつんだもの、暗示するものだと言いたいのである。何にしても聖人が「真宗の教・行・証を敬信する」と云っていられる、そういう私どもの新しい信仰的主体の成立を語っているのが、歎異抄に「ただ一度あるべし」と言われている、その私どもの廻心であるに違いないのである。そして、思ってみればこの私も、池山先生という有縁の知識の教えを通してそのような廻心の時を迎えさせていただいたのであり、真実の教・行・証を敬信する釈迦諸仏の御弟子に加えられながら、その発遣の教命のもと、弥陀の本願をたのんでおのずから、本願の真実を行証せしめられる今日の私に、――つまり、南無阿弥陀仏と念仏して、仏の本願招喚の勅命に帰する身とならしめられながら、「迎へんとはからせたまいたる」阿弥陀仏のその摂取不捨の弘誓をたのみ、弘誓に応えて、普ねくもろもろの衆生と共に安楽国に生まれんことを願うという、そんな今日の私自身に出会わさせていただいているのである。



燃える静けさ

川畑愛義

（一）

池山栄吉先生の印象を一言であらわすならば「静けさ」ということでしようか。私のようなそそつかしいあわてん坊は先生のちようど反対の側に立っているような気がします。しかし先生もときどきとんでもないもの忘れをされたり、人違いをなさつたりするのです。そうした折私は申しわけないけれどなんだかほっとしたものです。あの謹厳そうな先生がにんまりもらす微笑につい私までさそいこまれたことが一再ならずありました、友子奥様によれば「それはしよつちゆうなんですよ」とのことでした。

（二）

先生御自身もやはり静けさをいつも求めていられたようです。岡山の旧制高校から、甲南高校の丸山環校長の懇望で大正十三年にで甲南に転ぜられましたが、京都の大谷大学に昭和四年においでになりました。当時はまことに不便な洛西の蓮華谷に居をえらばれたのも静けさへの生活導入ではなかったかと思われます。

私ごとで恐縮ですが、どういう御縁だつたかよく分りませんがいつからともなく先生の御病気の相談役の一人となっていました。はじめの頃先生はまだお元気でしたが、それほど御高齢でもないのに体力が次第に弱っていかれました。御病状としては肺気腫にともなう慢性の気管支炎と高血圧があり、風邪などをひかれますとなかなか治りにくい経過をとりました。食欲は次第に減退し、たんや咳だけでなく、身体のだるさや重さなどもうつたえられました。私はだんだん心配になり、いざという場合に間に合わないことを懸念し、当時大学へは歩いて行ける田中西浦町にいたのですが、わざわざ先生宅の近くに引越すことにしました。今から考えると、当時池山先生がいかに信仰界の巨峰としてそびえ、あまねく庶民の崇敬を集めていたかがよく分ります。

（三）

先生のおそばに移つてからはときどき珍らしいものが届いたからといわれて勿体ないほどの御芳志をいただきました。また宗教的集りのほかの時にも親しく招待を受けました。そのなかで今でも忘れられないのは虫の音をきくためにまねかれた晩秋の夜のことなどです。といっても別段何もないのですが、あの蓮華谷の深い森の中の小さな平地に建てられたお宅の静かなたたずまい、その庭のあちこちにすだく虫のとりどりの音のゆかしさ、それは時間と空間が統合されるなかで、静寂の交響楽の奏でる一ときでもありました、私はいまだかって静けさにしみ入るような、このような虫の音を身に感じたことはありません。これも先生の雰囲気ないしお人柄によることは申すまでもないことであります。

現代のあわただしい社会の流動性のなかで、先生こそ世の人々が渇望してやまない最高の稀少価値的存在だったといえましよう

（四）

私はよく先生と二人だけで対坐する機会に恵まれましたそした折先生はなかなかお自分の方から話をされることもないし、何かを語り出されてもぽつぽつと随想の結晶がとけて言葉になるようなものでした。それはまた他面、高遠な信味が凝集し、沈澱した後の上透（うわずみ）液が音となってしたたるようなものでした。

しかしそれよりさらに深い感銘として残っているのは、先生と差向いで坐っているときのことです。先生は何も言われず沈黙の人として静けさのなかにいられます。私も何も申上げることもありません、ただ先生の雰囲気にやさしくつつまれているのを感ずるばかりでした。

やがて先生の口から声にもならないような御称名が洩れてまいります、それは全く自然と静寂と仏性とが融合するようなものでした。私もしばらく瞑目して静坐するとき、先生はすでに現次元をこえて、仏々相念の境の境涯にいられるように思われたこともありました。

（五）

先生の静けさは決して最初からそなわつていたとか、或は動乱や困惑などとは縁の遠いものであるとか、そんなものではなかったと思います。青年時代は社会改革や今日の民主々義に情熱を燃やされたに違いありません。

明治三十五年にドイツの留学から帰られて、わが国の行政の封建性や社会の根強い因習の風潮に対し改善の道、ことに労仂者の福祉、広義の社会事業の実践の道を開かれました。そのために独立自営の立場を願つて神田須田町に徳香社と名づけて一介の「タバコ」商をはじめられました。

（これは日露戦争前に国の財源にするために専売となり、一小売商となられやがて御病気になられて廃業されました）

先生が深い信仰に生きられる前に、社会正義の実践者とし、或は気高いヒユーマニストとして行動されたことに対し、今日まで評伝する人は少ないようですが、先生のご生涯を語る時、私はこの側面を覆うてはならないと信じます

先生の晩年の大成された心境の中に波乱の多かった社会生活の経験がにじみ出ているといえば誤解にすぎないでしようか。私は先生の御生涯の中にもベートベンが言った、「苦痛を通じての歓喜」"dunch Leiden zur Freude"の心境をうかがうことができるように思うのです。先生のお歌に

たのまるるただ念仏のわれにあり
さるべき業はさもあらばあれ

とあるのも、内外の苦難や障害を超えられた先生の一大信念であり、体得された無碍の一道（一大願力）でもあったに違いありません。

最近私共の周囲にも多くの学生や若者達が道を求めています。しかし彼等の多くは他力真宗の真義を解せず、いつこうに信仰の話などを聞こうとさえしません。彼等から見るとき、多くの宗教人の語る信仰話は浮世ばなれした慰め言葉であつたり、深刻な現世の矛盾や混乱、それから社会の不法などについて真剣にとり組もうとする姿勢がみられないというのでしよう。

かえりみればその昔、親鸞聖人は国法で禁止された念仏を堅持されながら「主上臣下、法に逆き、義に違し……」不法の弾圧に対し、絶対の権力者や強力な体制派まで鋭く批判されて、猛省をうながす行動をとられ、主張を曲げられませんでした。池山先生もまた社会の現実に厳しい態度と妥協されない生活を一貫された人のように思われます。当時の若い者達が（不況で就職難、思想の弾圧、全体主義の横暴等の時代）先生のもとに多く参集して、そうした一切をよく洞察されての上の絶対信の示教を心から喜びうけたのもうなずかれるところです。

（六）

先ごろ日本へ来た世紀の名画、モナ・リザを描く時、巨匠レオナルド・ダ・ウインチは愛児を失つたモデルの母親の心をひきたてるために妙なる音楽を奏でたという伝説が残っています。そういえばあのなごやかな微笑の中にどこか哀愁のかげを見おとすわけにはいかないようです。単なる世間並の微笑ではなく、何かを秘めたような「なぞの微笑」が万人に訴え続けているのでしよう。

池山先生のあの清らかな微笑にも、モナ・リザのそれとは趣きを異にするでしようが、やはり単なる世俗的な、あるいは情緒的な微笑をこえた何ものかがただよっているように思われます。深い悩みや数々の苦闘をこえてこられた後に得られた微笑なればこそ人々の心にも何かを与えているに違いありません。

特にこの社会の実相をふまえた上での信味、あるいは生と死の交錯する現世のさなかに仂く願力への渇仰、さらには苦悩・憂悶・悲歎などに培われた法悦、そうしたもろもろの土壌の中からほのぼのと咲き匂う白蓮の花にもたとえられるものがあるように思われます。

まつ黒のタドンに火がついた時、あかあかと全面に燃えひろがらない時でも、内面ではふつふつとして火勢が広がり音なき燃焼が続けられているのです。

先生におかれては諦念の信仰が情熱の火となって燃えるとき、静かな称名が自然に申され、時にそれが触光柔軟（そくこうにゆうなん）な微笑となってあらわれ、周囲にも優しく、あたたかく、そして何よりも深い信楽の波動をただよわせていたに違いありません。ここにその寂静の波動を親しく感銘させていただいた因縁をこよなく感謝しながらペンをおくことにします。

昭和四十九年八月一日

私の大すきなおぢいちやん

村上幽果

私がおぢいちやんの病気を見まいに行った時、おぢいちやんのおきゆうじをしてあげると大変よろこびました。「幽果子のおきゆうじで御飯をたべると非常においしい〳〵」といっておねんぶつをとなえながらおかわりをしました

それから「富士の山」「春が来た」「山田のかがし」を歌いそのおどりをしたら、上手だ〳〵、なかなかうまいと云つて手をたたいてよろこびました。ごほうびに菓子をもらいました。しんちやんが僕もほしいといつたから、おじいちやんをなぐさめない者はもらえないよといってやりましたら、そうだ〳〵と云って笑いました。本当にすきなおじいちやんでした。

（呼子鳥より）

池山栄吉先生を憶う

長谷顕性

先生がなくなられてはや三十七回忌にもなると聞きますと、私は大層長いきしたものと思いますと同時に、あの頃御老齢だと思っていた先生はまだお若かつたんだなあと思われてきます。

十年程前に花田先生から頂いた池山先生のお写真を壁に掲げておりますが、薄い羽織を召してお居間に端坐していられますお姿は、矢張りお若いと思いますが、でも老大人、維摩居士の風格で悠揚せまらず〃ただ念仏ですね〃とぽつんと一言おつしやっているようです。床の間の幅（ふく）に、樹心弘誓仏地、流念難思法海、とあります。これは大谷光演法主の書かれたものであります。この文言さながなに坐っていられる先生は、ただ念仏の人であったなあとまた改めて憶うことです。人生六十九年、右往左偏し、迷い惑うて浮いたり沈んだり、悲喜交流の私にやつぱり、だだ念仏だよ、とおしえたもう先生の慈語がきこえてまいります。

数年前のことですが、女子高校で担任であった生徒たち二十余名の同級生の会に招かれて参りました。往年のあいらしい乙女達はもう四十を越してやがて孫を持つようになる人さえありました。その中の一人、丁さんが、

「先生が私に卒業式の後で、色紙に書いて下さった〃たまさかに如来に面す春の風〃は何のことか解らぬままに、時折りくちずさんできましたが、近頃これは先生の御心境を述べられたものだと解りまして、いまさらうらやましくあの色紙を仰いでいます」とこう云うのです。そこで

「いやあれは私の心境ではありません。私の学生時代にお教をうけた池山先生という方（かた）の句なんで、私はこの先生にあやかりたくて拝借したのですよ」と申しましたら、

「そうですか、たまさかにも仏様にお会いなされるとはありがたい方なんですね」とその人は申しました。私は思わずお念仏申したことでした。

たまさかに如来に面す春の風。これは先生のお写真を拝して、感銘深く拝誦されます。また私は町内の或方に一筆書いてくれと頼まれてちび筆をふるいました。それは、

久遠このかた子ゆえの廻向　わたし一人をかたおもひ

の一首でした。これも先生の大切なお味いの歌でありますが、その人はこれを表装して床の間に掛けています。それには左側に、池山栄吉先生作、顕性謹書と添書しました。私の字は稚拙ですけれど、この句―先生は都々逸と仰言っていますが―は千古不磨の金言で光を放っているように感じます。これは先生の御著書「信を行く旅人」に出ていますが、直接に何度かおききした記憶もあります。お念仏が先生にとどくまでの永かったこと、如来の善巧方便の大いなる思徳を感佩された先生の御信境さながらにききまつります。この句のついに「衆生かわいや生死の海におのがつみから浮き沈み」というのがあります。先生の深くお味いなされた如来大悲のみ心があきらかにあらわれております。この句もさる人に書いてあげました。

私は青年時代、京都で先生に直接お目にかかつたことは余り多くありませんでしたが、次の二つのことは今も明瞭に覚えて居ります。

その一つは、蓮華谷のお宅に稲津紀三師と一緒に先生をお訪ねした時のことです。私は自分の心におもい浮んでいることを、ああだ、こうだと気やすくお話しました。先生が、うんうんとうなづいて聞いて下さるので、それをいいことにして何でも申し上げました。後日、さる友人から、

「君はなかなか我が強いね。話をすれば「が」が多いのでもそれがよく分かる。先度池山先生にお会いした時、君のことを話したら、池山先生は〃成程長谷君は―だが―だ。―だけれども―だと「が」と「けれども」とをよくつかいましたねと云われたよ〃と語ってくれました。私の心中をお見通しの先生をおもうて恐れ入りました。

もう一つ、今もはつきり覚えていることがあります。それは京都の女子学生親鸞会が洛東の徳善寺（？）で催された時、先生は御講話のあとで、誰かが、お釈迦様と親鸞聖人との交渉をいろいろ質疑せられました。その時先生は、

「私は歎異抄によつて親鸞聖人のはらそこはとつくり頂けますが、お釈迦様のことはよくわかりませんよ」と、何げなく仰言つた。私は心ひそかに、何かたよりない思いがしたものでした。恐らく私は乃公はその交渉を明かにしてみせようぞと思っていたようです。

爾来三十余年間、先ず聖人の真髄に接しようと教行信証の読解に没頭してまいりました。歎異抄に導かれた方が一番近道だよと訓して下さつた方もありましたが、教行信証の方により強くひかれたのであります。けれども今にして

聖人の真髄に本当に接することが出来たとは云えません。それはなぜだろうかと思いますに、池山先生が、お釈迦様のことはわかりませんよ、仰言つた、あの謙虚なお心がないからでないかとおもわれます。

矢張り有縁の御聖教に心身を投げこんでいただかないといけないのでありましょう。池山先生は、そのことを御身にかけておしえて下さつていることをおもいます。

（昭和四十九年七月二十五日）

私のノート

福本慶子

学生の頃、奈良の古本屋に普及版の真宗聖典が出ていると、その頃にしても安い価格だつたので見つけると買つていたものでした。粗末なレザーの表紙のものや上等な美しい皮表装のものなど数冊になつていましたが、そのうち友人に贈つたりしたものの他に、実家の仏壇に残して来て戦火に焼けたものもありました。また、嫁した娘の家の仏壇にそっと納めて来たりして今はあと二冊残っています。

一冊はふだん拝読していたのですが、もう一冊の方を最近開いてみましたら、歎異抄第二章の行間に、私にしてはめずらしく丁寧な書き込みがしてありました。その聖典の巻末の余白に、当時の「よろこび」などを記していて、それには、昭和八年九月十八日とか、十月二十八日など、それぞれの年月日を書き込んでいますので、それらの内容から考えて、その後、昭和九年か、十年のいつの日かの聴聞を書き込んだものであろうと思われます。

その頃は池山先生の御法話を度々聞くことも出来ましたし、蓮華谷のお宅にもよせて頂いた思い出多い時代でありました。すつかり忘れていた自分の書き込みを目を細めて読みながら、もう一度書きとめておきたいと思いました。

第二章の御文を次の様に七節に区切り、始めに「顔容七変」と記し、せまい行間に①真面目（仏の子の

誕生を願って大元気）と記しています。

「おのおの十余箇国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御こころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり」

②目的の対象を定めらる。

「しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり」

③からかい気味の微笑

「もししからば、南都北嶺にも、ゆゆしき学生達、おほく座せられて候なれば、かの人々にもあいたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり」

④虚心担懐（とつておき）

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをこうぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」

⑤恨然長太息（理性）

「念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じても存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。そのゆえは、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が　念仏を申して地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそうらはめ、いずれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」

⑥光顔巍巍（仏の化身として）

「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや、法然のおほせまことならば、親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずそうろうか」

⑦　微苦笑の聖人（唯一なくてはならぬはからい—決定心）

「詮ずるところ愚身の信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからいなりと」

真宗の信心決定の次第を御自身のものとして歎異抄を読

みとられた先生は、常々第二章を信仰の表門としてお話下さいました。先生の御法話をその頃さながらにうけたまわることが出来た喜びは言葉を知らないのでございますが、先生はその後の御著「仏と人」のうちに「微苦笑の聖人」と題されてこの御法話をお書き下さつていますが、そこでは「面々のおんはからい」を丁寧に書き残され

「念仏取捨の決意として護信途上唯一のゆるされたるはからいであろう。即ち信仰への決定的一歩〃念仏もうさんとおもいたつこころ〃である。それも畢竟、矜哀の引入であったとは後からきずくはからいである」と述べて居られます。

かつての日も、また今後も、歎異抄について御法話を下さいます方々は後をたたないと思いますが、池山先生の表現は⑥の「光顔巍々」を別にすれば　全く独特で、恐らくおききなされない方には驚かれるばかりの「すばり」とした魅力をもつてることでございましよう。江戸つ子でいらつしやつた先生の「しやれた」表現は、単なる人間的、個性的な言葉ではなくて、御信仰を通した「法」と「人」との一味の個性とでも申し上げられるのだと思います。

先生の御法話を聞きなれたものには、そうしたお言葉になれてしまつているとともに、目を閉じれば思い出せるお話ぶりとともに、浄土にかえられた先生と、人間としての先生が御法話のうちに一つになる、還相の御廻向としてよろこばしていただけるのでございます。

昭和四十九年七月二十九日。

追　記

ご心配をいただきましたけれどおかげさまで七月末に退院が出来ることになりました。

胆石の方はこれで四十年保証とお医者さんが云つて下さいますが、胆石が保証出来ても、他の方に多分「ぼろ」が出来ることでございましよう。

もの書く気力もまだ十分ではございませんが、不備のまま原稿を同封いたしました、何とか御加筆下さいませ

七月二十九日。

京大附属病院第一外科病室にて……

池山先生の追憶と感謝

北岡行男

先生の御教を受けし末輩、つつしんで洪恩を偲び、駄句、粗歌を奉る

富士山の如きお姿身にしみぬ

とわに身に泌むやおん師の仰せ言

お育てを受けて阿蒙や老の秋

身の障り溶けて失せけり日向ぼこ

ありがたき一会なりけり春惜しむ

吾の癖のさもあらばあれ春の風

吾のさがも癖も御存じ蓼の花

汗の身の力湧き来し空仰ぐ

阿弥陀湯に浸るこの身や青嵐

忘れがち憶ひ出しては爽かに

——○——

犬獲り人夫を追跡し給ひし先生

いとし犬拉りし荒くれ男をば

いずこまでもと追ひ給ひける

いとしさに暴も力も何かせん

一途に追ひし親心かな

ひたびるに衆生救はん御仏の

慈悲の深さはかくもあらめや

——○——

先生に鳴き寄りしカナリヤ

餌を慾るにあらずカナリヤ慕ひ寄る
　親しき心　通ひけるにや

――○――

われら先生を訪ひて

抱き来ししこりも問ひも淡雪の
　　如く消えけり　おん前に出て
後に蹤くわたらに賜びし阿弥陀風呂
　　とわに畏く　ありがたきかな

昭和四十九年五月二十九日

追　記　（北岡）

夏近くなりました。小生も頸推損傷の後遺症の足弱を持ちながら此所紀南で勤務医生活を続けています。慈光を通じて、近角先生、池山先生にお会い出来また一道会の雰囲気に浴し、更に福島、白井両先生の慈語を蒙り、其他先輩や同朋の信の息吹きに触れ、滾々たる法脉に掬し得ますのは大きなよろこびであります。今回、池山先生三十七回忌に投稿のお誘いを受けお粗末ながら同封原稿をおとどけいたします。

田辺市長野にて

池山先生法話断片

松江　岩人記

「父母孝養のためとて聖人が念仏されたことがないとはそれは御自身の助かることを喜ばれてのお念仏で、親孝行と思うて念仏してはならぬということではない、親孝行のためと思う暇がないとの意味でしょう。

私は歎異抄を読みますが、母は大変喜んで聞きますから時々母と共に読みましたが、一度だつて母のためと思って読んだことはありません。母が聞いて喜ぶから、序に読んだだけで孝行のためと思ったことは恥しながら一度もありません。聖人もたとえ御両親の墓前で合掌念仏されても、それは御自身の助かる感謝で親に回向する何物でもなかつたとの御述懐と味います。」

（呼子鳥抄出）

池山栄吉先生小伝

花田正夫

先生は明治六年、東京の代々真宗の家庭に生れ、特に篤信のご母堂によって宗教性を養われました。時々宗教の話を聞かされたり、法話会等にも御伴をせられましたが、お母堂が重病の時、それは一度ならずあったのですが、その都度「私は今度は死ぬかも知れない、死ねばお浄土へ参らして頂く。お前もご信心を頂いて後からおいで！そうでないと親子は一世というからこれ限りになる、是非信心を頂かなくてはいけない。でもそういかなかつたら、いいや、私がお浄土から迎いに来てあげるから」と、当時小学生の先生に仰言つた由です。然しこの言葉が大きくなられた後まで心に泌みこんでいて、信仰の道から遠のいているなと感じるとすぐ立ち戻らされました。こうして二十歳を過ぎる頃には内省の傾向が深まって、真宗の教は人生の実際にいかにも適切であると感じだんだんあこがれるようになられました。又ドイツ語協会学校に後藤新平氏などと一諸に学び友人等が反宗教的なことを言うと強く反論せられました。卒業後、学習院に就職せられましたが、明治三十一年に時の政府が、外来文化が非常な勢いで我国に流入して、特に影響の強いキリスト教の力を畏れて、あらゆる宗教を法律の支配下に入れようとして宗教法案を議会に提出しました。これでは信教の自由が失われるばかりでなく、種々の宗教を悪平等に取り締まる等々を指適して法案反対の運動がおこり、大谷光演法主を中心として近角常観師が活動されるに及んで池山先生も全面協力し、後藤新平氏は法律顧問となりました。その結果、超党派的な賛成で法案は徹廃されました。その功労によって明治三十三年から三十五年にかけて東本願寺から近角師と先生は欧洲留学生として派遣され、近角師は世界の宗教事情、池山先生は広義の社会事業と労働者福祉の研究に没頭されました。

帰国後は巣鴨の真宗大学（大谷大学の前身）の教授となり、三十六年にはかねての研究を実施するため、時の桂首相や、台湾民政長官児玉源太郎氏や、後藤新平氏、其他官

民有志の後援のもとに社会事業を起し、自活自営のために神田須田町で徳香社という煙草店を開業し、苦学生の世話などもせられました。

然し三十七年に日露の風雲急を告げ、政府の財源の一つとして煙草は政府の専売となり、徳香社は煙草の一小売店となり、営業不振におち、久美油や絵葉書販売まで始められたが、加えて先生の病気がすすみ、真宗大学も辞し、徳香社も閉店し、府下に浪々の生活のやむなきにいたりました。先生の苦悶はこれから始まった由で、御夫妻揃つて本郷の求道学舎に近角師を訪ねて歎異抄を読みはじめるようになられ、これが後年信仰促進の一大要因となりました。

先生の三十三歳の時、遂に新たな方面からかねての理想を実現しようとの願いから、大阪の桜宮に移住、痼疾の療養をせられているうちに、深刻な自己省察も加わってきました。そうこうしているうちに二年越しの病気もようやく運動の自由を恢復された三十五歳の秋の暮に、近角師と沢柳政太郎氏の斡施によって岡山の第六高等学校に赴任されました。

岡山の生活は東京、大阪でのそれにくらべて、山に入ったような清閑で清貧なもので、信仰を求めるのに静慮の機会に富んだものでしたが、後年私共に「この静閑と清貧ということはありがたい、両者は私共の荒れ狂う心の駒を信仰の門戸に駆る鞭と柏車になった」と先生は述懐せられた。一方岡山の人々は先生を篤信者として迎えましたが、御自身は、念仏が出にくいこと、又、仏陀の存在の点滅、その都度、常没常流転の悲歎のくり返し等々が続きました。

そうした間にも仏力に催された内省だけは絶えず進み、自己の真相を見せつけられる機縁があちらからもこちらからも押し寄せて、二進も三進も行かぬ窮地に追いつめられて、とうとう「大きなる蔑視」に突きあたられました。

「―自分のやつたことの中で第一の動機は功名心であった。自己の利益を中心としたエゴイズム一点張りで、良心は無力、私心ばかりに左右されているではないか―こうした自分が名誉を求めているが、もし誤ってそれが得られたにしても虚名にすぎぬ―」と、希望の青い色はあせて灰色の絶望に沈み、茫然と途方にくれられました。

更に地上の名誉どころでない、自分と作る罪業の重さに何処まで落ちこんで行くことやら、出世間的な救いの網は見当らず、暗夜に荒れ狂うはてしない荒海の浮沈の連続でした。

遂に四帖半の書斉に閉じこもって、信仰書をひもといても、思案を重ねても、信心の端緒も見あたらず、机に坐って居ることも出来なくなって、四つ匐いになって〃ああ、まことの信心が欲しいな！〃と、心のひとみをこらされた

刹那に、歎異抄の二章の

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

という御文がヒョツコリ胸に浮かび、その感動が劇しかつたと見えて、畳の上に金文字となって映った、その御文にひきつけられて、忽然として心の奥にひらめいたのは、

「さうだ！と我とわが心に頷いて、親鸞とあるのを私と置いて、よき人とあるのを親鸞と換えて、その文を口の中で繰り返したかと思った途端、まるで千仞の堤がきれたかのように、思わず知らず念仏がドツと口をついて出た、高らかに、よどみなく。光明は見えた、夜は明けた、たしかに救いの綱が手に触れた。今の今まで心を閉ざしていた淋しさ、はかなさ、味気なさは、一声一声の念仏にかき消されて、それと入れかわりに、頼もしさ、有難さ、喜ばしさが潮のさすように心にみちわたるのを覚えた。これが動かぬ信の味いだな！とこの時はじめて知らされた」

と、先生は『絶対他力と体験』の中に述べていられる、これ大正二年、先生の四十二歳（数え年）の時でありました。

大正五年の夏、広島県福山市鞆町の妙円寺で近角師と会合され、先生は「廻心というはただ一度あるべし」の題で御自身の信の体験を話されました。近角師はこれを聞かれて非常によろこばれたとお聞きしております。

しかし、悲しいことには大正六年秋に清子夫人が次第に痩せが目立ち、食事もすすまず、県病院で診察をうけられると、それとなく胃ガンで手の施しようもない状態と知らされ、非常な驚愕と失望に沈まれましたが、その刹那にハツと如来のお慈悲に気づかれ、胸も張り裂けるばかりの切なさがスーツと開け、著しい念仏者となられました。しかし病勢は段々悪化し、大正七年五月に清子夫人は五人の御子を残されて三十九歳で、存分に別れを惜しまれながら往生せられました。この当時の有様を近角師宛の信仰書簡に詳しく述べていられますが、「衆禍の波転ず」とかねて聖人の仰言ったことを身をもって知らされたと私共にも語って下さいました。そして亡き夫人の記念に「ドイツ語訳歎異抄」を出版になり、これが歎異抄の外国訳の日本での最初のものでありました。

大正九年にお老母も亡くなられましたが、その当時、ドイツ語訳を読んだ人々から懇望されたのと、御自身にも本抄が一般に読み易いようにと願っていられたので、亡き母上の記念として「意訳歎異抄」を出版せられました。

次いで大正十一年、御自督を中心に「絶対他力と体験」の出版。私はこの年に入学し、理科乙類でしたから直接先

生からドイツ語を学び、又担任教授としてお世話になりました。

その頃と思いますが、御次男の敏郎さんが助骨カリエスで何本が切除せねばならぬという時、病床で徹夜せられた先生が「自分に親らしいところがあるだろうかと内心あやしんでいたが、子の病床にいて、子が欲しいという前に自分がすでに用意している。それにつけて親と子は二つであって一つ、しかもどの子も一人一人がかけかえがない、一人一人に直結していることが知れ、仏陀のみこころを新しく仰がれた」と仰言りながら

衆生かわいや生死の海に、おのが罪から浮き沈み
久遠このかた子故の廻向、わたし一人をかた思い

と都々逸調で讃仰されました。

又、有名な犬捕り事件も忘れられぬことでした。私共はドイツ語の試験日で先生を教室でお待ちしていましたが、とうとうお流れでした。当日、先生は出校しようと家を出られると隣家の奥さんが「お宅の犬が犬捕りに！」との急報で、そちらに走り寄られて、すつたもんだと交渉の末、犬捕りと一緒に警察まで出頭し、やつと連れ戻されたためでした。飼主の不注意から捕えられた犬が、助けを求めて叫ぶ姿に、どうしてもほつておけなかつたそうでしたが、後になって、仏のお心もそうなんだねと、しきりに念仏していられました。

大正十三年の夏、甲南高校の丸山環校長（元六高校長）の懇請によって甲南に転じられましたが、お別れの時、私は友人三人と招かれて、御馳走になり、その時

「君達と別れ住むようになるが〃さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべしと聖人が仰言つているが、縁次次第で、罪悪の免疫性のない身には、将来どういう生活をするかも保証の限りでない、どういう業さらしをして誰からも呆れられる様なこともありうるが、何事もすべてを御胸におさめて下さる聖人は御一緒して下さるね」

と仰言ったのですが、このことが、先生にお別れして四年後、私自身が罪業の重さに絶望の渕に立つた時、この聖人のお言葉がフト心に浮かび唯一の救いの光を恵まれました。その時、父の墓前に御礼まいりをし、次いで住吉の先生の御宅に御礼にうかがわずにいられませんでした。これが私が生れてはじめて〃ありがとう〃と言うことの出来た産声（うぶこえ）でした。

甲南高校時代の先生は、芦屋の仏教会館や、名古屋の信道会館などに時々出講せられましたが、阪大仏青のために大阪の堂ビルで歎異抄について話されました。それを速記

した坂元緑郎氏や青山広志氏の労によつて「信を行く旅人」が昭和二年に出版されました。

昭和三年に友子奥様を迎えられましたが、同四年四月に大谷大学に招聘されて京都の紫野に一時仮寓されました。丁度その頃、京都学生親鸞会が出来ていて、京都二条の鍵屋で歓迎会を催しました。一人一人が自己紹介を終えて、自然に念仏が皆の口から漏れていた時、先生は開口一番、

古池や　蛙とびこむ　水の音

の句を引用され「古い池には沼気がブツブツと湧くが、若い諸君の口からブツブツと念仏が出ている、これには古い御縁の催しがある」と、遠い宿縁を指適され、次に

たまさかに如来に面す春の風

の一句を示されて「何時も自分の煩悩にかまけて、如来を後ろにしているが、そうした私がこの春、如来に直面させられた」と前置きされて、御三男の甲南高校生の幸吉さんが、急性腎臓病で重態の報せをうけられ、枕頭に見舞われると、幸吉さんは「私はやりたいことを存分にやつてそのことについて思い残すことはありませんが、こんなに早く駄目になるとは知りせんでした。今となっては何時もお父さんの仰言った、お念仏だけです」と、自分の死を自覚して、十年も前から称えていたような調子で念仏申されました。そのお姿の中に如来に直面せられたその感懐をこの句に述べられました。

昭和四年の秋に洛西の蓮華谷の新居に移られましたが、学生親鸞会に度々御講話をお願いし、又会員が直接お宅にお伺いしてお導きをうけました。それから数年が先生の信仰活動の一番熾んな時でありました。大阪に女子親鸞会が出来、岡崎市にも親鸞会が結ばれ、御足労を頂き、又京都学生親鸞会の聖鸞寮にお招きして法雨に浴しました。

先生の御自宅では「一つの会」を催されるなど、第一次大戦後の思想混迷と思想弾圧、そして就職難等々の時代に大きな燈炬となって下さいました。そして先生の常の仰せは「池山におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人親鸞聖人の仰せを蒙つて信ずるほかに別の子細なきなり」

の一句でありました。又よく引用されましたのはニイチエの超人、ゲエテのファウストやウイルヘルムマイステル等々でありました。然し、歎異抄が先生のいのちを貫いていられて〃生ける歎異抄〃の感をうけました。先生の還暦の正月に、

○たのまるるただ念仏の我にありさるべき業はさもあらばあれ

○惨怛たる悔いの残せし一一のあとかたもなき無碍の一道

の二首を示されて「歎異抄の第七章が体読出来た、但し天神地祇のところだけは概念としてはわかるがそれ以上に出られない」と附言せられました。そして歎異抄はソウセージのように体験によって満たされて行くものだ」と注意され、また「本抄が全部分らねばならぬというものでなく、本抄の何処かが心身にうなずけると、やがて全体もうなずくことが出来る、海の水を一掬すると全体の味も知れるように」とも語られました。

さて先生の平素は「親鸞弟子一人も持たず候」の文字通りの生活でありました、来る者をこばまず、去るものを追わず、悠々と如来聖人の御弟子としてのお歩みでした。又あらゆる人々の悩みや訴えを先生はよく聞きとって下さる人で「ああそうですか！」と仰言って、別に何等の指図もされないで、静かにお念仏申されているという風でした。それでいておたずねする者の心が自然に転じて、念仏を唱和し、心はあかるくなったのは不思議でした。昔、愚脈和上が脳一本立てて、何人にもこたえられると、そこに自然に解決の道がひらけたという故実も思い併せました。

昭和八年頃から心臓病、動脈硬化症、肺気腫という難病を持たれていましたが、十年頃、腎臓病で重態におちられ生き死にもあぶないという有様でしたが、幸に恢復され、その御病中の所感は『仏と人』の中の「ただ念仏」の頂に書きのこされました。それからはとかく健康もすぐれられず谷大の方も辞任され、時々御宅を解放されて「一つの会」を催されて、有縁の方々と信の集いをせられる程度で、清閑な御晩年でした。

当時の先生が非常におよろこびになった一つは、永年ペルーで活躍していられた御長男の寿夫様が御見舞に一時帰国せられたことと、今一つは、社会主義の弾圧をうけて山科の刑務所に居られた御次男の敏朗さんが、慰問さんた友子奥様に「お父さんにお土産を！私がお念仏するようになりましたと伝えて下さい」と云われたことでした。お宅にお伺い申すと「花田君、敏朗が念仏申すようになったよ」と、お喜びが全身にあふれておられました。

昭和十二年に『仏と人』とを出版せられましたが、十三年に入り御健康は段々わるく、十一月八日に行年六十七歳て、文字通り、念仏の息絶えおわられました。

先生が死を自覚せられて友子奥様に

「お前も一人になるんだなあ、しかし別れつきりじやないよ、またあえるからな」

と云われ、奥様が非常にお別れを悲しまれると

「生きてやりたくつてもいのちがないじや仕様がないではないか、しつかり念仏するんだ、〈、お念仏で何処

までも手をつないでいくんだ」

と慰め励まされ、又、末娘の愛子さんに

「愛子お念仏しておくれ！」と仰言り、愛子さんが南無阿弥陀仏々々々々と念仏申されると、非常にお歓びになり「これで亡くなったお母さんも、今のお母さんも、みんなよろこぶ」と云われると共に、ペンと紙を要求され、「南無阿弥陀仏を言え」と愛子さんに書きとらされ、お筆は「南無阿弥陀仏アイコ」と書き残されました。

又、いよいよこの世でまとまった最後のお言葉は

「何も残るものはない、何も残るものはない

ただ念仏だけが残ってくれる、ただ念仏だけが残ってくれる。えらいこつたよ！ありがたいこつたよ！」

と、お苦しい中からも、お顔をほころばせてとぎれとぎれながらささやかれました。

告別式は、十一月十二日、東本願寺前、重信会館で執行京阪神はもとより、遠く福井、愛知、四国、岡山等々から先生を慕う人々が参会。一時半に葬儀委員長、舟岡省五京大教授の告知で始り法名は、近角常観先生の撰、大谷光演法主の親筆になる「無碍院釈一道栄信士でありました

一周忌には、先生を追慕する人々の手で「呼子鳥」が編集され、又京大楽友会館では有縁の人々によって追悼会が催されました。

爾来、先生の御命日には、御遺骨の安置されている洛西の浄住寺へ期せずして、お育てをうけた者が集つて、生ける先生にお会い申す思いで会合し続けてきましたが、年を経るに従って、段々と集る人々も多くなり「一道会」と名がつきました。

更に、昭和三十九年の先生の二十七回忌に、浄住寺境内に、先生筆の名号碑が建立され、永く先生の御徳光の放たれる基が出来ました。今年はすでに三十七回忌、六月末に岡崎市の巽閣で先生の追悼講演会が催され、感銘深い会でありました。

◇　◇　◇　◇　◇

御　案　内

時・十月二十七日（日）午后一時

所・京都市右京区山田開町浄住寺。

池山先生第三十七回忌一道会。

京都駅より苔寺行きバス終点下車、

新京阪、上桂駅下車

あとがき

本年は池山先生の三十七回忌に当りますので、特掲いたしました。皆様から追慕録を頂きありがとうございました。更に十月号にも掲を続け、秋の一道会に皆様に読んで頂きたいと存じます。

京都での先生の生活は僅かに九年でありましたが、円熟された念仏の徳香は帰すべきところのない私共に、大きな燈炬を掲げて下さり、御在世中よりもお亡くなりになったのちに、御縁に恵まれた人々の心に深く大きい導きを頂いております。それは父母の在世中よりも、亡きあとに、種々の縁にふれて、子の心に輝いてくるに似ております。

信国様の「出会い」は、最近創刊されました『願海』から転載させて頂きました。川畑様は北米を巡回講演後、何かと寸暇もないお忙しさの中を早々にユニイクな原稿を頂きました。先生の最後まで献身看護をして下さいましたことは御礼の言葉もありません。

長谷様は、先生から聞きとられた慈語を、御郷里にあっていよいよ自他共々に御信証下さる有様、ありがたいことであります。

福本様は胆石で手術などうけられ、原稿は断念しておりましたのに、聞法せられた一コマをノートから頂きました。胸一杯に想出はお持ちでしょうに……。

北岡さんは六高時代から私共と御一緒に先生に親炙された人で、紀南の田辺市で保健医として元気に働いていられます。同期の香川県の玉尾さんは一寸手の放せぬ仕事が詰っていて原稿を貰えませんでした。いずれ後程に何か書いて下さることでしょう。

池山先生の小伝は、この際御存じのない方々に読んで頂くためと、私自身の心に先生を彫みつけたかったためでありましたが、御徳をけがすことや、云い足りませぬことが多かったと思いますが、皆様の御叱声をお願いいたします。先生の御著書『仏と人』が近く京都の百華苑から出版されることになりました、ありがたいことです。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、一道会例会。南区駈上町二ノ八八。一道会館。市バス新郊通一丁目下車。地下鉄、新瑞橋下車。

○ 毎月二十四日、午前午后。教西寺法話会。昭和区小桜町二丁目四番地、教西寺。市バス、北山下車、又は御器所通り下車。

定価　半年　五〇〇円（送共）
　　一年　一〇〇〇円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
　　電話八二一局七〇三七番

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎

発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
　　振替口座　名古屋一〇四七〇番
　　郵便番号四五七